

デカルト Descartes, René 1596 ~ 1650

フランスの哲学者。中部フランスのトゥレーヌ地方のラ・エイ La Haye(現在は Descartes と改名)に生まれる。父は高等法院評定官で法服貴族の家系。10歳のときイエズス会のラ・フレッシュ学院に入学してスコラの学問を、卒業後ポワチエで医学と法学を学んだ。20歳のとき、「世間という大きな書物」を学ぼうと決意し、パリやオランダへの旅に出る。志願将校としてオランダ軍に入りドイツに赴いた23歳のとき、「終日炉部屋の中でただ一人閉じこもり」思索にふけり、夢の中で心理の霊が神によって送られてきたと感じ、自力でする新たな仕事として哲学全体を神から与えられたと信じるようになった。

その後フランス、イタリアなどを旅し、32歳のとき学問改革の計画を実行するため『精神指導の原則』を執筆した後、オランダに移住した。このころ新しい自然観に基づいて光や宇宙、人間の身体を論じた『世界論』の構想をもつが、1633年に地動説を唱えたガリレオがローマの宗教審問所で有罪になったことなどから公刊を断念。1637年41歳のとき『方法序説』を『屈折光学』『気象学』『幾何学』と併せて公刊した。1641年には『省察』を刊行し、思想界に注目される。しかし当時の思想界で主流のスコラの学問に反し、無神論者との非難などを受け、多くの論争に巻き込まれた。晩年スウェーデンの女王クリスティーナより招聘され、ストックホルムに赴くが、同地で54歳の生涯を閉じた。

Great Books 20 方法序説(Discours de la méthode)

1637年オランダのライデンで出版された。正式な書名は「理性を正しく導き、学問において真理を探究するための方法の序説。加えてその方法の試みである屈折光学、気象学、幾何学」である。

全体は6部から成っている。第1部は「良識(Bon sens = ボン・サンス)はこの世でもっとも公平に分け与えられている」で始まり、いろいろな学問についてさまざまな考察をし、「世間という大きな書物」に見出される学問をめざし、「ある日、私自身のうちでも研究し、とるべき道を選ぶ」と結んでいる。第2部はデカルトが探求した方法の規則について、炉部屋の体験を経て、明証性 分析 総合 枚挙の四種の規則を述べている。第3部ではそうした方法から導き出した道徳(生きるためのモラル)の規則について、自分の国の法律と慣習に従う、疑わしい意見であっても、一度決めたらそれでやりとおす、運命よりも自分に打ち克ち、世界の秩序よりも自分の欲望を変えること、の三つの格率を述べつつ、暫定的道徳(morale provisoire)を提示している。

第4部は、神と人間の魂の存在証明と形而上学の基礎について述べている。徹底した懐疑の後、「**わたしは考える、ゆえにわたしは存在する**」との哲学の第一原理に至る過程、神の存在証明、幾何学的真理と神の存在論的証明、神の存在から懐疑の解除(理性の明証性)などを考察している。第5部では自然学の諸問題の秩序、とくに心臓の運動や医学、あるいは人間と動物の魂の差を述べ、機械論的自然学の構想が書かれている。第6部では自然の探求に必要な実験の重要性などや今後の学問の展望を述べている。

ヨーロッパ近代に思想的な地平を開き、精神と物質の二元論、意識、自然観などの概念とともに、当時思想的な著作はラテン語で書かれるのが常であったのを、初めてフランス語で書かれた哲学書としても評価されており、後世に大きな影響を与えた。

Key Phrase わたしは考える、ゆえにわたしは存在する

ほんのわずかの疑いでもかけうるものはすべて、絶対に偽なるものとして投げずて、そうしたうえで、まったく疑いえぬ何ものかが、私の信念のうちに残らぬかどうか、を見ることにすべきである(中略)私は、それまでに私の精神に入りきたったすべてのものは、私の夢の幻想と同様に、真ならぬものである、と仮想しよう決心した。しかしながら、そうするとただちに、私は気づいた、私がこのように、すべては偽である、と考えている間も、そう考えている私は、必然的に何ものかでなければならぬ、と。そして「私は考える、ゆえに私はある」というこの真理は、懐疑論者のどのような法外な想定によってもゆり動かしえぬほど、堅固な確実なものであることを、私は認めたら、私はこの真理を、私の求めていた哲学の第一原理として、もはや安心して受け入れることができると、判断した。

<野田又夫(訳)『世界の名著 16 デカルト』「方法序説」 中央公論社>

「わたしは考える、ゆえに私は存在する」という言葉は、原文では Je pense, donc je suis と書かれている。ラテン語で書かれたデカルトの他の著作である『哲学の原理』や『省察』では、これと同じ内容を Cogito, ergo sum(コギト エルゴ スム)としている。デカルトは自らを存在する一つの実体と考え、これを精神の本性とし、思惟する存在としての自己を見出したのである。

◆ *Great Books* 文献案内

- 📖 方法序説(岩波文庫) / 谷川多佳子(訳)
岩波書店 1997年刊 137p <I135/テ> 資料番号 20959813
- 📖 デカルト著作集1 方法序説 / 三宅徳嘉(ほか訳)
白水社 1973年刊 376, 121p <135.1/13/1> 資料番号 10219905
* 『方法序説』三宅徳嘉, 小池健男(共訳)
- 📖 世界の名著 22 デカルト / 野田又夫(編)
中央公論社 1967年刊 566p <080/5/22> 資料番号 12784393
* 『方法序説』野田又夫(訳)
- 📖 世界思想教養全集1 近代思想のめざめ / 松浪信三郎(ほか訳)
河出書房新社 1963年刊 398p <080/6/1> 資料番号 10134807
『方法序説』小場瀬卓三(訳)
- 📖 デカルト選集1 方法叙説・情念論・書簡集1 / 落合太郎(ほか訳)
創元社 1951年刊 220p <135.1/5/1> 資料番号 10219814
- 📖 Great books of the Western World vol.31 Descartes. Spinoza / Robert Maynard Hutchins(par)
Encyclopaedia Britannica 1989年刊 463p
<080/G/31> 資料番号 20257465
- 📖 Discours de la méthode (Classique Garnier) / Louis Liard(éd.)
Garnier frères 1942年刊 190p <135.1/D> 資料番号 13273347

◆ 理解を深めるために 参考文献案内

- 📖 デカルト『方法序説』を読む(岩波セミナーブックス) / 谷川多佳子(著)
岩波書店 2002年刊 176p <135.23LL/5> 資料番号 21499595
- 📖 デカルト的省察(岩波文庫) / フッサール(著) 浜渦辰二(訳)
岩波書店 2001年刊 375, 15p <I134/フ> 資料番号 21365549
- 📖 デカルト = エリザベト往復書簡(講談社学術文庫) / 山田弘明(訳)
講談社 2001年刊 339p <135.23/4> 資料番号 21430368
- 📖 デカルト伝 / ジュヌヴィエ - ヴ・ロディス = レヴィス(著) 飯塚勝久(訳)
未来社 1998年刊 409, 9p <135.23GG/1> 資料番号 21076161
- 📖 デカルトにおける人間の発見(思想史ライブラリー) / フェルディナン・アルキエ(著) 坂井昭宏(訳)
木鐸社 1979年刊 309, 3p <135.1L/18> 資料番号 10219988
- 📖 デカルトとパスカル / 森有正(著)
筑摩書房 1971年刊 526p <135.1B/11> 資料番号 10219889
- 📖 ヴァレリ - 全集9 哲学論考 / ポ - ル・ヴァレリ - (著) 野田又夫(ほか訳)
筑摩書房 1967年刊 558p <958/24/9> 資料番号 12154894
- 📖 デカルト(思想学説全書) / 所雄章(著)
勁草書房 1967年刊 222, 11p <135.1/14/1> 資料番号 10219947